

## アスクレピオスに鶏を

——ソクラテスの最後の言葉について——

### 朴 一 功

紀元前三九九年春、ソクラテスは刑死した。プラトンの『パイドン』によれば、刑執行の日、ソクラテスに親しい人たちは、夕暮れまで彼と哲学や魂不死の論証をめぐる対話をかわす。それが終わって刑が執行されることになるが、毒杯を仰いだソクラテスの様子は、臨終に立ち会ったパイドンから聞き手のエケクラテスに、次のように報告されている。

……毒を与えたこの者はあのかたにさわってみて、しばらく時をおいてから、足首のところから足全体を調べていましたが、そのあとで彼はあのかたの足首のところを強く押して、感じるかどうかをたずねました。が、あのかたは、感じない、と答えました。そして次に、今度は向こうずねを押しました。さらにそのようにして上の方に移っていきながら、彼は私たちに、あのかたが次第に冷たくなり硬くなつてゆくのを指し示したのです。そして彼みずからがさわってみて言いました。これ（冷たさ）がこのかたの心臓のところまで来ると、その時、このかたは逝かれるでしょう、と。

こうしてすでに、ほとんどあのかたの下腹部のあたりまで冷たくなっていましたが、その時あのかたは、顔の覆いを取り払って——顔が覆われていたからです——、言いました——まさにこれがあのかたの口から出た最後の言葉でした。

「クリトンよ」とあのかたは呼びかけました、「アスクレピオスに、われわれは鶏一羽の借りがある。どうか、忘れずに、お返しするように」。

「うん、きつとそうするよ」とクリトンは約束しました、「しかしほかに何か言うことはないかね」。

こうクリトンがたずねましたが、あのかたはもう何も答えませんでした。少したつてから、からだがびくりと動き、係りの者が顔の覆いを取り払うと、あのかたの眼はじつと座っていました。これを見てクリトンは、口と眼を閉じてあげたのです。(『バイドン』一一七E四—一一八A一四)

問題は、ソクラテスの最後の言葉が謎めいていることである。「アスクレピオスに、われわれは鶏一羽の借りがある。どうか忘れずに、お返しするように」という言葉は、突然、脈絡もなく発せられており、なぜこのようなことが言われたのか、判然としない。アスクレピオスは光明の神アポロンの子であり、医療の神である。この言葉を口にしたソクラテス自身が病気を患っていたとか、病気が治ったといった事態は、『バイドン』ではまったく述べられていない。のみならず、プラトンの他の作品のどこにおいてもそのようなことは語られていない。それどころか、ソクラテスはまさに臨終の状態にあり、命が絶たれる寸前なのである。また、ここで「借りがある」という言葉は、「われわれは借りがある」(ὀφεισμένοι)というふうに、一人称複数形の動詞で語られており、「われわれ」という主語は、ソクラテスだけでなく、クリトンや、さらには他の友人たちをも指しているように見える。いったいこ

の言葉はどのような意味で語られたのであろうか。<sup>(2)</sup>

### 一 ニーチェ的な解釈

「医神アスクレピオスに借りがあるというのは、この神から恩恵を受けていることを意味する。ソクラテスが求めている行為はお返しであり、何らかの病気が癒されたことが前提になっていると考えられる。問題は、癒された病気が何であったのかということである。ソクラテスが病気を患っていたというようなことが示唆されていない以上、その病気を、通常の身体の病気と受け取れることは困難であるように見える。ここからニーチェは、次のように言う。

死に臨んだソクラテス。……私の思うには、彼は生涯の最後の瞬間にも沈黙を守ってくれたらよかったのだ――

そうすればおそらく彼はいつそう高級な精神の一人に数えられたことであろう。ところが、それが死か毒薬か敬虔か悪意かそのどれだったか知らないが――とにかくある何ものかが、あの最後の瞬間に彼の口を解きほぐした、で彼は言った――「おお、クリトンよ、私はアスクレピオス神に雄鶏一羽の借りがある」。この笑止でもあり恐ろしくもある「末期の言葉」は、聞く耳ある人には、こう聞こえる――「おお、クリトンよ、人生は一個の病気である！」と。……ソクラテス、このソクラテスが、人生に悩んでいたのだ！『悦ばしき知識』三四〇<sup>(3)</sup>

### 3 (朴)

ソクラテスは病気を患っていたわけではない。彼の最後の言葉から、むしろ人生そのものが病であって、ソクラテスは病としての人生に悩んでいたのだ、という意味をニーチェは読みとっている。死は人生という病からの回復であって、それをもたらすアスクレピオスにソクラテスは感謝しなくてはならない。これがニーチェの解釈である。<sup>(4)</sup>

逆説的で魅力的な解釈ではあるが、必ずしもニーチェ独自のものというわけではない。同様の解釈はすでに古代末期に見える。新プラトン派の哲学者ダマスキオス（後四六二頃―五三八以降）は、『パイドン』に関する二つの注釈書のなかで次のような説明を与えている。

（D二）なぜ彼は、アスクレピオスに鶏を返し与えるのか？——それは彼が、生成の世界で魂が患つてしまった病気を癒すためではないか。また『神託』（後二世紀の『カルデア神託』）に基づけば、おそらく彼自身もアポロン讃歌を歌いながら、自分に固有の起源へと駆け戻って行きたいのであろう。（『パイドン』註解Ⅰ）五六一<sup>(5)</sup>

（D二）なぜ彼は、アスクレピオスにこの捧げ物の借りがあると言ったのか、そしてなぜ彼は、最後にこの言葉を口にしたのか？ とはいえ、もし借りがあったのなら、彼は注意深い人だったから、忘れはしなかったであろう。——いや、それは魂が多く、の労苦から解放される際に、癒しの神の摂理を必要とするということではないか。それゆえ、『神託』（『カルデア神託』）もまたこう言っている、上昇してゆく魂たちはアポロン讃歌を歌うのだ、と。（『パイドン』註解Ⅱ）一五七<sup>(6)</sup>

（D二）における「生成の世界で魂が患ってしまった病気」、あるいは（D二）における「多くの労苦」といった表現は、ニーチェの「人生は一個の病気である」といった捉え方と同趣旨のものである。しかし注意すべきは、アスクレピオスに捧げ物をするという行為が、病気を癒すためのものであり、祈願の意味をもつと解されていることである。<sup>(7)</sup>（D二）では、「彼自身もアポロン讃歌を歌いながら、自分に固有の起源へと駆け戻って行きたいのであろう」

とつけ加えられ、(D二)では、「魂が多くの方苦から解放される際に、癒しの神の摂理を必要とする」と言われているからである。これは『パイドン』前半部のソクラテスの発言を受けたものかもしれない。彼は自分がしばしば見た同じ夢に触れ、「ソクラテスよ、文芸をなし、文芸を仕事とせよ」という夢の言葉を文字通りに受け取って、アポロンへの讃歌をつくったと言っており(六〇E一六二A)、また、世を去ってアポロンのもとに赴くことをうれしく思う白鳥と自分が同じ仲間であり、同じ神に仕える使徒だとも述べていたからである(八五A一B)。

ニーチェはこうしたことに触れてはいないが、人生を病と見る解釈は、死が願望の対象であることを意味する。とすれば、この解釈には一つの難点がつきまとう。なぜなら、「借りがある」という表現は、神の加護を求めるものではないからである。もつとも、この難点は、ソクラテスの言葉がまさに死の直前に発せられたことに留意するならば緩和されるかもしれない。ソクラテスはほぼ死の状態に達していたからであり、それを無事に実現してくれたと思われるアスクレピオスに、何らかのお返しをしなければならないとも考えられるからである。

しかしながら、アスクレピオスは、詩人ピンダロスによって「死に捕らわれた男を生き返らせた」と伝えられる(『ピュティア祝勝歌』第三歌五六行)、また悲劇作家アイスキュロスによって「死者たちを甦らせるすべを正しく心得ていた」と言われる(『アガ멤ノン』一〇二二―三行)。アスクレピオスの仕事は命の回復であって、死をもたらしことではない。それゆえ、死の実現を恩恵と見るのは、やはりきわめて逆説的であって、こうした見方をソクラテスが最後に表明したとは考えにくい。いずれにせよ、ここで解釈上の真の問題は、ソクラテス自身が人生そのものを病とみていたかどうかということであろう。ニーチェ的な解釈の是非は、この問題の解決にかかっていると云ってよい。

## 二 ソクラテスは人生を病と見ていたか

この問題に最も迫ったのは、おそらくフーコーである。彼は、人生が病という見方はけっしてソクラテスのものではないと論じている。『パイドン』でソクラテスは、みずから命を絶つこと、すなわち自殺が神意にもとめるのはなぜか、という問題に関して次のようなことを述べている。

事実、この問題に関する秘教的な教義のなかで語られている言説によると、われわれ人間はある囲いのなかにいるのであつて、けっして自分をこの囲いから解放したり、逃亡したりしてはならないのだが、これは何か重大な教説であつて、その真意は容易には見通せないもののようにほくには思える。ただし、ケベス、これだけは適切に語られているとほくに思われるのは、神々はわれわれに配慮しているのであつて、われわれ人間は神々にとつての所有物のひとつだということなのだ。(六二B)

「囲い」が何を意味するかについては解釈上の問題があるが、フーコーは、これは「監獄」を意味しないとして、こう論じている、「ここではつきりと示されているのは、この世において、われわれは神々による配慮と心遣いの対象であるということである……それゆえ、プラトンによれば、自殺してはならない。われわれは——そうした監獄を、ではなく——そうした神々の好意と心遣いを逃れることができないということである。したがって、人生は一つの病であり、人は死によつてそこから解放されるのだ、という考えが、われわれはこの世において神々の保護と心遣いのもとにあるのだ、という考えと、しっくりいくことはありえない<sup>(9)</sup>」。

他方、ソクラテスは自分に無罪の投票をしてくれた裁判官にこう語りかけていた。

しかしながら、裁判官諸君、あなたがたも死に対しては善い希望をもってもらわねばなりません、そして、善い人には生きているときも死んでもからも、悪いことは一つもないのであつて、その人のどんなことも神々に配慮されないことはないのだという、ただこの一点を真実のこととして心に留めておかねばなりません。(『ソクラテスの弁明』四一C-D)

ここで「善き人には……」と言われている文章は、「人生が一つの病でありうるという考えを最も決定的なやり方で拒否しているテキスト」だとして、フーコーは、その文意は、「神々は賢明な人間にかかわる事柄に気を配るということ、そしてその結果として、そのような人間にとっては、この世においてもあの世においても、害悪はありえないということだ」と説明し、ニーチェ的な解釈を全面的に斥けている。<sup>10)</sup> その論拠はしかし、十分であろうか。

フーコーが着目する「神々はわれわれに配慮している」、あるいは「神々に配慮されないことはない」といった表現に含まれている「配慮」という言葉の含意は、必ずしも病の概念を排除するものではない。「配慮(エピメレイア)」は病人について語られる用語でもあるからだ(『法律』第四卷七二〇D<sup>11)</sup>)。神々がわれわれに配慮するのは、われわれが病気だから、と解することも可能なのである。いずれにせよ、ここで手がかりとなるのは、『パイドン』において「病(ノソス)」という語が実際に使われている文章であろう。魂の不死をめぐる対話者ケベスの提出した反論について、ソクラテスは言う。

魂が何か強靱なものであり神的なものであって、われわれが人間として生まれてくるよりなお以前にも存在していたのだということを、どれほど明らかにしたとしても、すべてそうだったことは、君の主張によれば、魂の不死性を示すものではなくて、ただ魂が長命であって、これまでのばかり知れないほどの時間にどこかに存在していたということを、またそれが多くのさまざまな事柄を知り、かつ行なってきたのだということを示すだけであるかもしれない。しかし実際、そうしたことだけでは、魂とは不死なるものであったのだ、ということにはけっしてならない。むしろ魂が人間の肉体に入ってきたこと自体が、魂にとつて滅亡のはじまりであり、いわば病のようなものであったのだ。そして魂はその生涯をまさに苦しみながら生きてゆき、最後には、死と呼ばれる事態において滅んでゆく。(九五C四-D四)

ソクラテスの口から、魂が人間の肉体に入ってきたこと、そしてそのことが「病のようなもの」と言われているが、これは対話者ケベスの見解であって、ソクラテスのものではない。またここでは魂は、「死と呼ばれる事態において滅んでゆく」と言われ、「癒される」とは言われていない。この箇所を除けば、ソクラテスが人生を病と見る見解を述べているところはどこにもなく、死をその治癒とする見方も表明されていない。にもかかわらず、そうした見解をソクラテスが支持しているように見えるのは、むしろ彼の哲学の捉え方にあると考えられる。

実際、哲学に正しい仕方では本当にたずさわっている人々が、みずから励んでいるのは、死ぬこと、死んだ状態になること以外の何ものでもないのだが、おそろしくこのことは、ほかの人たちの気づかぬところだろう。ところで、もしそれが真実だとすれば、全生涯ただそのことだけを熱望してきたというのに、いよいよその事態が到来するに



およんで、自分がかねてより熱望し励んできたことを嘆くというのは、たしかに奇妙なことであろう。〔『パイドン』六四A四―九〕

肉体はわれわれの判断を誤らせる。知恵を得ようとすれば、われわれはできるかぎり肉体から遠ざからねばならない。死は肉体からの魂の離脱であり、それゆえ哲学者はこの状態を熱望する。正しく哲学するというのは、死の練習にほかならない（六五A―D、八一A）。これが『パイドン』におけるソクラテスの哲学についての見方であり、肉体への反発は激しく情熱的である。「あまりに激しく、あまりに情熱的なので、プラトン（『パイドン』のソクラテス）が人生を病以外のものと考えているとは信じがたい」とネハマスは言う。<sup>(12)</sup>そして、「肉体の愛好者」（六八C一）の徳は「何らの健全さもそなえていない」（六九B八）という言明は、「それだけでも、プラトンが肉体化された生と病との間に明確な結びつきが存在すると信じていることを示すものだ」と主張する。<sup>(13)</sup>

しかしこれは行き過ぎであろう。「何らの健全さもそなえていない」というのは、もっぱら肉体愛好者の生について言われているからである。<sup>(14)</sup>それだけではない。人生の全体を病と見る見解と両立しがたい発言も認められる。ソクラテスはパイドンに「言論嫌い」を戒めて、「われわれこそがまだ健全な状態になっていないのだということの方をずっと多く認めて、自分が健全な状態になるように勇気をふるって努力しなくてはならない、君やほかの人々にとってはこれからの全人生のために、よくにとってはこの死そのもののために」と言う（九〇E二―九一A二）。<sup>(15)</sup>つまり、ソクラテスによれば、死それ自体が魂を解放したり、癒したりするわけではないのである（一〇七C参照）。「死そのもののために」という彼の言葉は、健全な状態になって死を迎えること、死の時までその状態を目指す努力をすることを意味する。この観点からすれば、人生は一個の病であるというよりも、むしろ人生に何らかの病が

潜んでいる可能性がある、ということになる。この方向の解釈を追求したのは、ほかでもなくフーコーである。

### 三 魂の病——フーコーの解釈

ソクラテスの語りかけている相手がクリトンであることに注目し、フーコーは言う。「その治療に関してアスクレピオスに鶏一羽の負債がある病とは、まさしく、ソクラテスとの議論のなかでクリトンがそこから治癒した病のことである、と考えることができる。……魂を墮落させる当の意見から解放されて自由になり、それによって、自己自身と真理との関係に基礎をおく真なる意見によって選択し、決定し、決断できるようになったときに、クリトンはその病から治癒したのである。……アスクレピオスに感謝しなければならないのは、その病からの治癒であると考えられる<sup>(16)</sup>」。

クリトンはソクラテスに脱獄を提言していた。それは誤った意見であり、魂を損なうものではないか。これが作品『クリトン』から読みとりうることに認定したうえで、フーコーはさらに『パイドン』において、誤った意見が「病」として捉えられているかどうか、またその「病」がアスクレピオスに対する捧げ物の対象なのかどうかという問題に対処しようとする。<sup>(17)</sup> そのねらいは、「病」を、魂の病と、すなわち魂を墮落させる病と同定することである。魂の不死論証をめぐる、対話者のシミアスとケベスはそれぞれ鋭い反論を展開し、聞いていた者たちはみな沈んだ気持ちになるが、ソクラテスがそうした反論をどのように受け止めたのかを、パイドンはエケクラテスに次のように報告している。

ええ、それがエケクラテス、ソクラテスにはたびたび驚いたのですが、あの時おそばにいたときほど私が感心

したことは、いまだかつてありませんでした。

ところで、あのかたが語るべきことをもっておられたということ、このことは、おそらく、何も不思議でないかもしれません。しかし、私があのかたのことできっとわけ驚いたのは、まず第一に、あのかたがその若者たちの議論を、とてもうれしそうに、そして好意をもって、感心しながら受け入れられたことなのです。それから、私たちが彼らの議論によってどんな状態になっていたかを、あのかたはどれほど鋭く察してくださいましたことでしょうか。さらにはまた、そういう私たちの気持ちをどれほどよく癒してくださいましたことでしょうか、まるで敗れて逃げ出す兵士のようなありさまだった私たちを、あのかたはふたたび戦列に呼び戻し、自分のそばについてきて、ともにその議論を考察するようにと、あのかたは私たちを励ましてくださったのです。(八八E四―八九A七)

フーコーが着眼するのは、「癒してくださいました」(ibid. 八九A六)という表現である。ここに、「一つの治癒、誤った意見という病からのソクラテスによってもたらされた治癒がある」と彼は主張する。<sup>18)</sup> 実際、ソクラテスは「言論嫌い」を戒めて、「われわれこそがまだ健全な状態になっていないのだということの方をずっと多く認めて、自分が健全な状態になるように勇気をふるって努力しなくてはならない」(九〇E二―三)と述べていた。こうして『クリトン』と『パイドン』をつなぎ、フーコーは言う、「クリトンは、ソクラテスにとっては死ぬよりも生きる方がよいのだ、と彼に信じ込ませる一つの病に冒されていたのであり、ケベスとシミアスは、人が死ぬとき不死の魂が解放されるとは限らない、と彼らに信じ込ませる病に冒されていたのである。そしてここに、アスクレピオスが鶏一羽の借りがあるのはまさしくこの種類の治療に関してなのだということが確認されるように私には思われる」<sup>19)</sup>と。要するに、クリトンも、ケベスやシミアスも誤った意見という、魂の病から癒されたということである。だが、

この認定は妥当であろうか。

このような解釈に異を唱えたのは金山である。最大の理由は、「癒してくださった」の主語がソクラテスであるということである。「癒しは、仲間へのソクラテスの呼びかけがもたらしたものであり、アスクレピオスのわざではなかった」と正当にも金山は言う<sup>(20)</sup>。しかしながら、病に冒されたのがクリトンであり、またケベスとシミアスであれば、なぜソクラテスは「われわれは借りがある」と言ったのか、「われわれ」にはソクラテスも含まれていたのであり、したがって彼にも治癒がもたらされたのだと、フーコーは主張し、こう論定する。「完全に死んでしまったのではないが、みずからの生の最後の瞬間に到達したのでないが、誤った意見に損なわれ、魂を墮落させられるというリスクが存在する。それゆえ、ある意味においてはクリトンがその病から治癒したまさにそのときになされたかもしれないあの捧げ物は、クリトンの名においてのみならずソクラテスの名においてもなされねばならないし、ソクラテスの最後の瞬間、その死の瞬間にしかなされえないのである。……結局のところ彼の勇気のみが、ソクラテスの自分自身および真理に対する関係のみが、彼が誤った意見を聞きそれによって誘惑されるままになることを妨げたのである」<sup>(21)</sup>。

ソクラテスも誤った意見に冒されていたかもしれない。脱獄しようとする思いが魂の奥底にずっと潜んでいた可能性がある。その病から治癒したと言えるのは、ソクラテスが最後の最後まで脱獄しなかったその瞬間、すなわち死の瞬間においてだと、このようにフーコーは解し、ソクラテスの勇気を讃えている。しかし、もしそうだとすれば、なおさらその結論には、肝心のアスクレピオスが介入する余地はないだろう。誤った意見を克服できたのは、フーコーによれば、結局ソクラテス自身の勇気によるのであり、「アスクレピオスのわざではなかった」からである<sup>(22)</sup>。それだけではない。そもそも『パイドン』では、牢獄のソクラテスが「誤った意見」に損なわれる危険があるよう

には描かれていないのである。

すでに、日没も近づいていました。……あのかたは、湯あみをすっかり終えて戻ってくると腰をおろしましたが、それから後は、もうあまりたくさんのことを話ませんでした。そしてそこへ十一人の刑務委員に仕える下役の者がやって来て、あのかたのそばに立ち、「ソクラテスよ」と呼びかけました、「私はあなたについては、ほかの者たちの場合のように、醜態をとがめずにすむでしょう。なにしろその連中ときたら、私が長官たちの命令によって毒を飲むように告げると、私に対して腹を立て、呪いの言葉を吐きかけるのですから。しかし、あなたは違う、私は、あなたがここにいた間に、さまざまな面で、あなたという人が、これまでここにやって来た人々のうちで、だれよりも気高く、だれよりもおだやかで、そしてだれよりもすぐれた人であることを知りました……。さあ、それでは今、私が何を告げにここにやって来たか、あなたはわかりでしょう、さようなら。そして避けられない定めを、できるかぎり心やすらかに耐えるよう努めてください」。

こう言うと同時に、彼は涙を流し、ふり向いて立ち去って行きました。

するとソクラテスは、彼の方を見上げて、「君もまた、さようなら。われわれは君の言ったとおりにするからね」と答えました。(一一六B五―一一六D四)

「しかしあなたは違う(αἴτιος)」と言われ、さらに毒杯を仰ぐ場面でも、「あのかたは盃を口にもっていき、いとも無造作に、らくらくと飲み干されたのです」(一一七C四―五)と報告されている。このようなソクラテスに、魂の病を認めることは難しいであろう。

## 四 アスクレピオスのわざ

では、われわれはどのように解すべきであろうか。ソクラテスの言葉をあえて文字通りに受け取るほかにように思われる。つまり、だれかの病気が治ったと解することである。しかしすでに述べたように、プラトンの作品にそのような情報はまったく記されていない。それゆえ、さまざまな推測がなされてきた。ソクラテス自身、過去の従軍で負傷していたとか、あるいはソクラテスの家族のだれかが病気であったとか、いろいろと推測できる。<sup>(23)</sup>だが、どれも推測の域を出ない。そこである解釈者たちは、『パイドン』冒頭の一つの記述に注目したのである。

エケクラテス　ところで、パイドン、そこに居合わせたのは、どういう人たちだったのですか？

パイドン

その土地の人たちでは、まさにこのアポドロス、そしてクリトプロスとその父、それにヘルモゲネスとエピゲネス、またアイスキネスとアンティステネスがいました。それから、パイアニア区の人クテシッポスとメネクセノス、そのほか何人かその土地の人たちがいました。が、プラトンは、病、気、だ、っ、た、と、思、い、ま、す。(五九B五—一〇)

このやりとりを信じるなら、ソクラテスの刑執行の日、プラトンは病気だったのである。しかもソクラテスの臨終に立ち会うことができないほど、病は深刻だったはずである。しかし現に、プラトンは作品『パイドン』を書いている。彼は病から回復したのである。ソクラテスが最後に発した言葉は、プラトンが病から回復したことを受けて、アスクレピオスへの感謝を表わすものではないか。プラトンはわれわれの仲間であり、彼の回復はわれわれす

べてにとつてよろこびである。われわれはアスクレピオスに捧げ物をしなければならぬ。このような解釈が、古くはクラークによつて示され<sup>(24)</sup>、後にモウストによつて積極的に支持され<sup>(25)</sup>、最近では金山によつて強力に主張された<sup>(26)</sup>。だが、この方向の解釈も推測の域を出ない。臨終のソクラテスにプラトンの病が回復したという知らせが伝えられたことを示唆する記述は、どこにも見当たらないからである。「プラトンは、病氣だったと思います」という報告は作品冒頭で語られ、この事実が作品全体を支配していることは疑いの余地がないように思われる。作品末尾のパイドンの言葉は、「これが、エケクラテス、私たちの友人の最後でした。私たちが知りえた当代の人々のなかで、……最も正しい人の、これが最後だったのです」(一一八A一五―一七)というものであつた。プラトンの病が癒されていたのであれば、この前後で何らかの言及がなくてはならないだろう。<sup>(27)</sup>

とするなら、ソクラテスはいったい何を言おうとしたのであろうか。注意すべきは「鶏」という捧げ物である。鶏は一般的な捧げ物と考えられるかもしれないが、<sup>(28)</sup>実はそうではない。通常アスクレピオスに捧げられるのは、鶏ではなく、牛だからである。<sup>(29)</sup>牛を捧げる余裕のない場合<sup>(30)</sup>、あるいは牛ほどのものが必要とされない場合に鶏が捧げられるのである。<sup>(31)</sup>つまり、鶏は捧げ物としてはささやかなものと考えられる。ソクラテスはささやかなお返しをアスクレピオスにするよう遺言しているのである。しかるに、ソクラテスが病氣を患つていたという記述は見出されない。とすれば、単純にこう考えられるだろう。おそらくソクラテスは「死にいたるまで病弱でなかったことに対して神々に感謝していたのだ」と、言い換えれば、「健康に恵まれた生涯に対して健康の神に感謝しているのだ」ということである。<sup>(32)</sup>無病もアスクレピオスのわざである。こうしたことは、ソクラテスのみならず、臨終に立ち会っているクリトンやそのほかの友人たちにも言えることである。だが、アスクレピオスへの借りは健康だけであろうか。

アスクレピオスは医療の神であるだけでなく、死者をも甦らせる神である。『パイドン』における最初の魂不死論証の終わりでソクラテスはこう語っていた。

……親愛なるケベスよ、生きるということを授かっているかぎりのすべてのものが死んでいって、ひとたび死んだなら、死んだものはその形態にとどまり、ふたたび生き返ることがないのだとすれば、はたして、最後には万物はことごとく死に絶えて、生きているものは何も無いということになるのは、大いなる必然ではないか。……生きかえるということも、生きている人々は死んだ人々から生じてくるということも、また、死者たちの魂が存在するということも、いずれも本当にあることなのだ。(七二C五―七二E一)

「生きている人々は死んだ人々から生じてくる」という主張、これには対話者たちはまったく疑問を投げかけない。しかるに、死者を甦らせるのはアスクレピオスのわざである。ソクラテスはこの世に生を受け、クリトンや他の友人たちもそうである。そして彼らは現在までこの世で命をつないできたのである。「何らかの病気がふりかかってくれば、そのことによって、われわれのたずさわる實在の狩獵（＝哲学）は妨げられてしまうことになる」とソクラテスは言っていた（六六C一―二）。この世に生まれ、重大な病に冒されなかったことが哲学活動の前提条件であり、アスクレピオスからの贈り物であったのだ。

これは常識的な解釈に見えるかもしれない。だが、そうではない。解釈上、注意すべきことが一つある。それは、『パイドン』のソクラテスの見解は歴史的ソクラテスのものではない、ということである。魂不死説は『パイドン』の作者プラトンが作品のなかでソクラテスに語らせたものであって、ソクラテス自身のものではないからである。



実際のソクラテスは死が「無のようなもの」である可能性を認めていたのである（『ソクラテスの弁明』四〇C六―七）。とすれば、ソクラテスの最後の言葉はプラトンの創作であろうか。その言葉の史実性を疑う者もいれば、そうでない者もある。<sup>(34)</sup> 確かなことはわからない。しかし仮にその言葉が史実でないとしても、プラトンがそれをソクラテスにふさわしいものとして描いていることは疑われない。しかるに、アスクレピオスに言及するその言葉は、魂ではなく、身体への配慮を示すものである。これは意外に見える。なぜなら、その含意は『パイドン』の魂不死説やイデア論といった形而上学説に結びつかないばかりか、ソクラテスの説く魂への配慮とも対比をなすものだからである。これはどういうことであろうか。手がかりは、ソクラテスが毒杯を仰ぐ場面にあるように思われる。

すると、あのかたはそれを、いとも機嫌よく受け取られたのです、エケクラテスよ、少しも震えずに、顔色や顔つきも何ひとつ変えることなく。むしろいつもと同じように、牡牛のような目で、その男を見つめながら言いました、「どうだろう、この飲み物をだれかに捧げて注ぐというのは？ 許されるだろうか、それともだめかね」。

「飲むのにちょうど適量と思われる分だけしか、私たちはすりつぶしていないのです、ソクラテス」と彼は答えました。

「わかった」とあのかたは言いました、「しかし、神々に祈るだけなら許されているはずだし、またそうしなくてはなるまい。この世からあの世へ移り住む旅路が、幸運なものになりますように、とね。これがまさにぼくの祈ることだ、どうかそうなりますように」。

これらのことを言い終えるや、あのかたは盃を口にもっていき、いとも無造作に、らくらくと飲み干されたのです。それまでは、私たちの多くも、何とか涙をこらえて泣かずにいることができたのですが、あのかたが飲むのを、

そしてすっかり飲んでしまわれるのを見ると、私たちはもうだめでした。この私はといえば、われにもあらず、涙がどつとあふれ出てきて、はては顔をおおって、わが身を嘆いたのです——そうです、あのかたのことを思つて嘆いたではありません。わが身の不運を嘆いたのです、何という友を奪われてしまったのかと。

一方、クリトンは私よりもなお先に、涙をこらえることができなくなつて、席を外していました。またアポロドロスは、すでにそれまでも、ずっと涙を流し続けていたのですが、ついにその時は、嘆きと悲痛のあまり大声をあげて泣きだし、その場にいたすべての人たちの胸をいやが上にも引き裂いたのです、ただひとりソクラテスその人を除いて。(一一七B三—一一七D六)

ソクラテスの友人たちは、みな悲嘆にくれる。なぜか。言うまでもなく、ソクラテスという友が奪われたからである。その悲嘆は、ウィリアムズが指摘するように、「たとえ不死性やイデアの世界が認められたとしても、この世とこの世の友愛は真の価値をもつ、ということを表わしている」<sup>(35)</sup>のではないか。この観点から見ると、ソクラテスの最後の言葉は、『パイドン』で論じられる、いわば彼岸的な世界からこの世界へと、あるいは死から生へと、あるいは魂から身体へと、われわれの視線を反転させるものであつて、その含意は、この世における人生の最も基礎的な条件（＝誕生と何らかの健康）を、われわれはアスクレピオスに負っている、ということになるだろう。

生きること、健康であることは、ソクラテスによれば、必ずしもそれら自体に価値があることではない。それらは哲学と結びつき、徳と結びついてはじめて価値を帯びる。ソクラテスはこの世に生まれ、命をつなぎ、哲学の人生を歩んできた。その哲学によつて人生は生きるに値するものとなり、その対話活動は友人たちと共有されるものになった。アスクレピオスに借りが生じるのは、まさにこの場面においてである。彼らの人生そのものが何ものか

に支えられていたからである。「アスクレピオスに鶏を」という指示は、その事実への応答であって、この世の命のささやかな価値を告げているように思われる。

## 註

- (1) 「忘れずに、お返しするように」(ἀποδοτε καὶ τῇ ἀντιδοτῇ) という指示が二人称複数の命令形で語られていることから「借りがある」の一人称複数形は文字通り複数を指しているともモウストは論じたが (Most G. W., “A Cock for Asclepius”, *Classical Quarterly* 43, 1993, p. 105) への複数形は「謙讓の複数」(plural of modesty) として、単数の「私」を指しているとも考えられる (Calder, W. M., “Socrates’ Rooster Once More” *Mnemosyne* 52, 1999, p. 562)。よびらを意味するかは、文意の解釈に依存するだろう。
- (2) ピーターソンは「ソクラテスはうわごとを言っている」とする見解など、二十二種類もの解釈を列挙している (Peterson, S., “An Authentically Socratic Conclusion in Plato’s *Phaedo*: Socrates’ Debt to Asclepius”, pp. 34–35 in *Desire, Identity, and Existence*, ed. Reshoko, N., 2003, Kelowna)。
- (3) ニーチェ『悦ばしめ知識』(Nietzsche, F., *Die Fröhliche Wissenschaft*, 1887) からの引用は、信太正三訳(ちくま学芸文庫、一九九三年)による。
- (4) この見方を採る解釈者たちは多い。Archer-Hind, R. D., *The Phaedo of Plato*, London, 2<sup>nd</sup> ed., 1894, p. 146. Bluck, R. S., *Plato’s Phaedo*, London, 1955, p. 143. 岩田靖夫(訳)『プラトン『バイアーン』』(岩波文庫、二〇〇四年、一九二–二三頁)など。
- (5) テキストは<sup>6</sup> Westerink, L. G. (ed.), *The Greek Commentaries on Plato’s Phaedo*, vol. II, Damascius (Amsterdam, 1977, p. 285) による。
- (6) Westerink, *op. cit.*, p. 371.
- (7) 祈願を読みとる解釈は<sup>7</sup> ウェルズ (Wells, C., “The Mystery of Socrates’ Last Words”, *Arion* 16, 2008, pp. 137–148) にも見られる。
- (8) 拙訳『饗宴／バイアーン』(京都大学学術出版会、二〇〇七年) 一七三頁訳註(一) 参照。
- (9) Foucault, M., *Le Courage de la vérité. Cours au Collège de France 1984*, Seuil/Gallimard, 2009, pp. 91–2. 引用の訳は、慎改康

之訳(ミシエル・フーコー『真理の勇気・コレージュ・ド・フランス講義一九八三―一九八四』、筑摩書房、二〇二二年、一三三―四頁)に準拠。訳文は引用の都合上、文体を含め適宜改変されている。

- (10) Foucault, pp. 92-93. 慎改訳、一二五―六頁。
- (11) 々の指摘はネヘマスに負っている (Nehamas, A., *The Art of Living: Socratic Reflections from Plato to Foucault*, University of California Press, 1998, p. 161)。
- (12) Nehamas, p. 161.
- (13) *Ibid.*
- (14) Cf. Peterson, p. 37.
- (15) 々の一文はギャロップに負っている (Gallop, D., *Plato Phaedo*, Oxford, 1975, p. 225)。
- (16) Foucault, pp. 96-97. 慎改訳、一三〇―一頁。
- (17) 「不正という病」(『クルギヤス』四八〇B一)への言及は、あいにくフーコーには見られない。
- (18) Foucault, p. 98. 慎改訳、一三三頁。
- (19) Foucault, p. 99. 慎改訳、一三四頁。「言論嫌い」の病から回復させるソクラテスというモチーフを読みとる解釈は、クルックス (Crooks, J., "Socrates' Last Words: Another Look at an Ancient Riddle", *Classical Quarterly* 48, 1998, pp. 117-125) にも見られる。
- (20) 金山弥平「ソクラテスの最後の言葉」『西洋古典学研究』62, 2014, pp. 24-38) p. 31.
- (21) Foucault, p. 100. 慎改訳、一三五頁。
- (22) ソクラテスは有徳な死を逆境下では自分の力の及ばない恩恵と見なしうる、とピーターソンは主張しているが (Peterson, p. 49)、その種の恩恵を医神アスクレピオスと結びつけるのは困難である。
- (23) ったした解釈の詳細については、cf. Most, pp. 104-105.
- (24) Clark, P. M., "A Cock to Asclepius", *Classical Review* 2, 1952, p. 146.
- (25) Most, 106ff. ソクラテスはプラトンを自分の後継者として正当化した、とまでモウストは主張する (p. 110)。
- (26) 金山は、プラトンの回復は、沐浴後のソクラテスに妻クサンティッペから知らされたと推測する (金山, p. 34)。
- (27) 「プラトンは、病気だったと思います」という断定を避けた表現は、パイドンが個人的に確かめうることにだけに表現を限定したためとも考えられるが (Most, p. 107, n. 67)、プラトンがソクラテスの不当な刑死に立ち会うのに耐えられず、病を装

ったのではないかと推測される (Calder, p. 562)。

(28) Bluck, p. 143.

(29) Robert Simms の古代ギリシア碑文調査 (Database of Greek Animal Sacrifices, 2001) による。

(30) ヘロンドス (前三世紀)『擬曲』第四「アスクレピオスに奉獻し犠牲を捧げる女達」冒頭で、主人公の女性キュンノーは言う、「…父なるバイエーオン様 (＝アスクレピオス)、…慈み深き御心をもて出立ち給い、わが家の壁の布告人なるこの雄鶏を点心として享け給え。それというのも、私共はみち足りた生活をしているものではございませんので。それならば、雄鶏じゃなくて、牡牛か、脂がうんとつた牝豚を、あなた様がやさしいお手を差しのべて、お祓いのけ下さいました病のお札に差し上げたのでございましたらうに」(高津春繁訳)。

(31) アルテミドロス (後二世紀後半)『夢判断の書』第五卷第九節ではこう言われている、「ある男が医神アスクレピオスに祈願して、もし一年中無病で暮らせたら、鶏を、一羽献納しよう」と誓約した。そして次の日もう一度アスクレピオスに祈願して、もし眼炎にかからなければ、鶏をもう一羽献納しよう」と誓約した。すると夜になって、男の夢にアスクレピオスが現れ『鶏は一羽でたくさんだ』と言った。男は病気にはかからなかったが、悪性の眼炎を患った。神はひとつの祈願でたくさんだと考えて、もうひとつの祈願を拒んだのだ」(城江良和訳)。病気の回復ではなくて、一年という期間の無病へのお返しが鶏一羽ということである。

(32) Nock, A. D., "Asclepius: A Collection and Interpretation of the Testimonies by Emma J. Edelstein and Ludwig Edelstein", *Classical Philology* 45, p. 49

(33) Calder, p. 562.

(34) この点については、cf. 金山, pp. 25-6. 金山は史実性を疑わない。

(35) Williams, B., *Plato*, 1997, New York, p. 39.

(大谷大学教授 西洋古代哲学 (ギリシア哲学))

〈キーワード〉人生、病、哲学

